様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７１０２９７

研究課題名（和文）「歴史観の相克にみる新疆の民族問題」

研究課題名（英文）Ethnic Tensions in Xinjinag from the Vantage Point of the Party-State and Uyghur Contending Historical Narratives

研究代表者
田中　周（TANAKA, Amane）

愛知大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：１０５７９０７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国新疆ウイグル自治区の民族問題を、ウイグル族と漢族の歴史認識の相克という観点から分析した点が新しい。三年間の研究を通じて、中華人民共和国建国以降に体制側が語るウイグル史が漢族中心に硬化していく状況と、これに対抗する形でウイグル族自身によるウイグル史が再構築される状況を確認した。両者の歴史観の相違が民族間の軋轢を生むメカニズムを分析し、さらには「歴史」が民族と国家間の紛争およびその和解に果たす役割を、一般化・理論化して考察できたことは意義深い成果である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to analyze ethnic tensions in China's Xinjiang Uyghur Autonomous Region (XUAR) from the vantage point of the Party-State and Uyghur contending historical narratives. The results of this research project support the idea that while the Party-State historical narrative on Uyghur has become increasingly Han-centered, Uyghur themselves have embarked on re-constructing its own history. By showing that those two contending historical narratives contribute to the rise of ethnic tensions in Xinjiang, the present study also makes several noteworthy contributions to the general theory of how historical narratives relate to both ethnic conflicts and post-conflict reconciliation processes.

研究分野：現代中国政治、現代中国の民族問題、ウイグル研究、新疆－中央アジア関係、ナショナリズム論

キーワード：ウイグル　新疆　中国　民族問題　歴史認識　ナショナリズム　国家統合　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

2009 年夏に新疆ウイグル自治区で発生した「ウルムチ事件」は記憶に新しい。広東省の工場で生じたウイグル族労働者殺害事件が発端となり、真相をあいまいにする当局への不満がウイグル族の間で強まった結果、7 月にウルムチ市の中心部でデモが繰り広げられ、大規模な衝突へと発展した。このウルムチ事件のみならず、漢族とウイグル族との衝突はこれまで幾度と生じてきた。当局はこれらを「反革命武装暴乱」、「民族分裂主義者の破壊活動」として徹底的に鎮圧してきており、民族問題が国内統治の安定性を脅かす大きな要因となっている。

政府は中華民族を構成する各民族は全て平等であると主張するものの、体制側が示すナショナル・ヒストリーでは、ウイグル族が文化的、経済的に漢族よりも遅れた民族として描かれる。新疆は 2000 年前に漢王朝が都護府を置いた時代から中国の不可分の領土で、ウイグル族は過去に独立王朝を樹立した事がない、と語られる事に対するウイグル族の失望の念は想像に難くない。このような状況で、改革開放後の 1980 年代にはウイグル族自身による歴史叙述の誕生が熱望されるようになり、多くの歴史書・歴史小説が生み出された。中でも特筆すべきはトルグン・アルマスという人物が描いた歴史書『ウイグル人』（1989 年出版）であった。トルグンはその著作の中で、ウイグル族は 8000 年の歴史を持ち、民族の故郷は現在の新疆を中心とした中央アジアであり、祖先は多くの高度な文明を有する独立王朝を築き上げてきた、という内容を記した。これはそれまで語られてきた体制側のナショナル・ヒストリーの主張を正面から否定したものであった。両者の歴史観の相克は現在も続き、民族間の軋轢を生む要因の一つとなっている。

本テーマは先行研究の乏しい分野といえる。従来は、貧困や不平等といった経済的要因、自治の形骸化といった政治的要因から、民族間の衝突や軋轢に対する分析が行われてきた。しかし本研究課題では、歴史認識に焦点を当て、文化的側面から新疆の民族問題と分析する点が新しい。

２．研究の目的

本研究の目的は、中国新疆ウイグル自治区の民族問題を歴史認識の面から検証することである。なぜ新疆においてウイグル族と漢族との間で衝突が生じるのか。この問いに答えるために、現代中国においてウイグル族の歴史が、体制側と少数民族側でそれぞれどのように語られてきたかを考察し、この二つの「歴史」の相克を軸に、新疆の民族問題を捉え直す。

具体的には、20 世紀前半、1950 年代、1980 年代の時期設定を行い、（1）体制側によるウイグル史の語らいが次第に硬化していく状況を明らかにし、（2）1980 年代にこのナショナル・ヒストリーに対抗する形で、ウイグル族自身の手による歴史の再構築が行われたことを明らかにする。

本研究が明らかにするのは大きく分けて、以下の 2 点である。

（1）体制側のウイグル史の変遷

民国期（20 世紀前半）、中華人民共和国建国初期（1950 年代）、改革開放期以降（1980 年代以降）で、体制側によるウイグル史が、漢族中心の歴史観に移行していく様とその背景・論理を明らかにする。

（2）1980 年代のウイグル史の再構築状況

①1980 年代のウイグル史の再構築が、ウイグル族知識人たちのいかなる意識と意図の下に進行したかをインタビュー調査を用いて分析する。

②1980 年代に生産されたウイグル史に関する歴史書、歴史小説のナラティブ分析を行い、20 世紀以降の思想的系譜を明らかにする。

本研究では、ウイグル語の現地資料を用いる事を強調したい。政治学的なナラティブ分析の手法を用い、かつウイグル語を使用する研究は極めて希少である。また、ウイグル族と漢族の歴史認識の相克を分析することで、両者によって「歴史」がいかに利用されてきたか、歴史認識が民族間の対立をいかに助長したか明らかできると考える。本研究課題は、民族問題における「歴史」の役割について、新たな視点を提供するものである。

３．研究の方法

本研究課題では、「収集」、「研究」、「発信」の三つのタスクを 3 年間にわたり推進した。

（1）「収集（海外・国内における調査・収集）」においては、中華民国、中華人民共和国期のナショナル・ヒストリーおよびウイグル族によって著された歴史文献（二次研究文献も含む）を収集し、関係者へのインタビュー調査を行った。

（2）「研究（基礎研究と研究会の開催）」においては、収集した資料を基に、資料分析、歴史書のナラティブ分析、インタビューの分析を行った。また複数の研究会において、成果の途中報告を行った。

（3）「発信（ホームページの開設と運営・論文発表・学会報告）」においては、3 つの発信手段により、研究成果の社会への還元を図った。

次に上記タスクに基づいた各年度の研究実施状況を記載する。

＜平成 24 年度＞

（1）収集

①海外での調査・収集：海外調査は中国で実施し、文献調査、インタビュー調査を実施した。用務地は中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市、イーニン市。

②国内での収集活動：国内でも可能な限り、中国語・ウイグル語の文献および二次研究文献の収集を行った。実物の購入が可能な場合は購入し、不可能なものは複写物の入手を行った。

（2）研究

①基礎研究：収集した文献、インタビュー内容の分析を通じて、本研究で設定したテーマの解明に努めた。

②研究会の開催：研究会において、基礎研究の途中経過を報告した。

（3）発信

①ホームページの開設準備：本研究の活動を公開し、その成果を還元するホームページ開設に向けた準備を行った。

②論文発表：初年度の成果として、1 冊の共編著（研究代表者が執筆した単著・共著論文三本も所収）を刊行した。

＜平成 25 年度＞

（1）収集

国内での収集活動：前年度に引き続き、文献収集を継続した。

（2）研究

①基礎研究：これまでに収集した文献、インタビュー内容の分析を通じて、本研究で設定したテーマの解明に努めた。

②研究会の開催：研究会において、基礎研究の途中経過を報告した。

（3）発信

①ホームページの運営：本研究の活動を開設し、その成果を公開した。

②論文発表：次年度の成果として 1 冊の共編著（研究代表者が執筆した単著論文一本も所収）を刊行した。

＜平成 26 年度＞

（1）収集

国内での収集活動：前年度に引き続き、文献収集を継続した。

（2）研究

①基礎研究：これまでに収集した文献、インタビュー内容の分析を通じて、本研究で設定したテーマの解明に努めた。

②研究会の開催：研究会において、基礎研究の途中経過を報告した。

（3）発信

①ホームページの運営：引き続き本研究の活動を広く一般に公開し、成果の社会への還元に努めた。

②学会発表：本研究の中間報告および総括報告として、その成果を三つの国際大会において発表した。

４．研究成果

以下に各年度の研究実施状況を通じて三年間のプロジェクトの研究成果を記載する。

（1）平成 24 年度

初年度にあたる平成 24 年度は、主に、体制側によって語られるウイグル族の歴史がいかに変遷してきたかを、文献調査および現地調査によって考察した。加えて、ウイグル族によって語られるウイグル史に関する調査を、現地調査を中心に行った。文献資料は、中国語とウイグル語の資料を中国および日本で購入した。現地調査は、2013 年 3 月 3 日から 3 月 13 日にかけて、中国新疆ウイグル自治区のウルムチ市とイーニン市で実施した。両市では歴史的な旧跡を訪問し、歴史事件や歴史人物の顕彰方法を検証した。また新疆史に重要な足跡を残した歴史人物の子孫や研究者を訪問し、インタビュー調査を行った。以上で収集した文献、インタビュー内容を元に、資料分析、ナラティブ分析を行った。

結果として、民国期（20 世紀前半）、中華人民共和国建国初期（1950 年代）、改革開放期以降（1980 年代以降）と時代が進むにつれて、体制側によるウイグル史が、漢族中心の歴史観に移行していく様を確認した。例えば民国期の歴史家曾問吾は、宋と明の時代には西域には中央の権力が及ばず、清の時代になって新疆はその領土に組み込まれたとする。しかし中華人民共和国期に入ると、新疆は古代より一貫して中国の一部であったと強調されるようになる。さらに 1950 年代には、清朝の新疆征服は「併合」あるいは「併呑」と表現されるのに対して、1980 年代には「統一」と表記され、統治の正当性を強調する形に書き換えられている。

また、平成 24 年度の現地調査では複数の新たな人脈を開拓し、平成 25 年度以降に本格的に実施する、ウイグル族自身の歴史認識に関する調査の基盤作りができた。

（2）平成 25 年度

平成 25 年度は初年度の研究実績をもとに、文献研究を中心にウイグル族自身の歴史認識に関する研究、特に 1980 年代以降のウイグル史の再構築について考察した。結果として、新疆への漢族の大量流入、漢語化が進む現状に対し、民族アイデンティティ喪失の危機意識を持つウイグル族知識人たちが主導した、自民族の歴史を発掘し、再構築するための諸活動を確認した。彼らよるウイグル民族史を題材とした作品の生産はその代表例であり、これら著作のナラティブ分析も進めた。

例えば歴史家トゥルグン・アルマスは 1989 年に歴史書『ウイグル人』を発表し、ウイグル族が中央アジアを舞台とする 8000 年の栄光の歴史を有すると主張した。本書はウイグ

ル族の祖先が打ち立てた独立諸王朝・王国と漢族の祖先が打ち立てた諸王朝との競合・対抗関係を軸に歴史を紡ぎだす。しかしこの歴史観は、中国が古来より統一多民族国家であったとする公定の歴史観とは相容れぬものであり、ウイグル族自身によるウイグル族史の再構築の顕著な例と言える。

以上で得られた知見は、平成 26 年度に本研究を総括する上で必要不可欠で重要な意義を持つ。

（3）平成 26 年度

最終年度にあたる平成 26 年度は、ウイグル族自身の手によって語られてきたウイグル史のナラティブ分析を引き続き進め、20 世紀以降の思想的系譜を明らかにした。加えて三年間の総括として、20 世紀を通じてウイグル族と漢族（体制側）が「歴史」をいかに語り、利用し、歴史認識の相克が民族間の軋轢・衝突の助長にいかに作用したかを考察した。

さらに以上の知見に基づいて、「歴史」が民族と国家間の紛争およびその和解に果たす役割を、一般化・理論化して考察できたことは意義深い成果といえる。具体的には、歴史には「原理としての歴史」、「実践としての歴史」、「障害としての歴史」という三つの役割がみられ、時に民族間・国家間の紛争を助長し、時にその和解を促進する。本プロジェクトが対象とする新疆の事例も例外ではなく、この民族間・国家間の軋轢に対する「歴史」の役割に関するフレームワークの中で、ウイグル族と漢族との間の民族問題を分析する事ができる。

以上の研究成果は最終年度に開催された三度の国際大会（海外一回、国内二回）で報告した。加えて平成 27 年度に完成する博士論文「中国共産党の国家統合－新疆における試みを中心に－（仮題）」の一つ章（中国共産党による新疆の文化統合を明らかにする章）として、本研究課題の成果が結実する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

①田中周「民族名称「ウイグル」の出現と採用」、鈴木隆・田中周編『転換期中国の政治と社会集団(WICCS 研究叢書 2)』国際書院、181-207 頁、2013 年、査読有。

②高橋健太郎・田中周「第 2 章：民族自治地方のひろがりと多様性－新疆ウイグル自治区と寧夏回族自治区」、中国ムスリム研究会編（田中周は編者の一人）『中国のムスリムを知るための 60 章』明石書店、30-35 頁、2012 年、査読無。

③田中周「第 5 章：カザフ族とクルグズ族－テュルク系遊牧民族」、中国ムスリム研究会編（田中周は編者の一人）『中国のムスリムを知るための 60 章』明石書店、46-50 頁、2012 年、査読無。

④田中周・新免康「第 52 章：民族文化の「復興」と民族史の強調—ウイグル族知識人の活動」、中国ムスリム研究会編（田中周は編者の一人)『中国のムスリムを知るための 60 章』明石書店、307-311 頁、2012 年、査読無。

〔学会発表〕（計　3　件）

①発表者：TANAKA Amane、発表標題："Minority and the State: the Case of Uyghur Nationalism in China"、国際シンポジウム名："China after Xi Jinping: the View from Japan and Australia Symposium"、発表年月日：12 Sep. 2014、発表場所：Australian National University（オーストラリア・キャンベラ）

②発表者：田中周、発表標題：「趣旨説明」、国際ワークショップ名：「現代中国における少数民族文化の動態」、発表年月日：2015 年 2 月 14 日、発表箇所：東京大学（東京都文京区）

③発表者：田中周、発表標題：「国家間の和解における歴史の役割」(第 2 セッション「歴史認識」・コメンテーター)、国際ワークショップ名「日中戦略不信の源泉-分析と対策-」、発表年月日：2014 年 10 月 19 日、発表箇所：早稲田大学（東京都新宿区）

〔図書〕（計　2　件）

①鈴木隆・田中周編『転換期中国の政治と社会集団』国際書院、2013 年、254 頁。

②中国ムスリム研究会編（田中周は編者の一人）『中国のムスリムを知るための 60 章』明石書店、2012 年、369 頁。

〔その他〕ホームページ（計　3　件）

①田中周研究室
http://amane.labos.ac/

②愛知大学 ICCS 国際中国学研究センター・田中周情報
http://iccs.aichi-u.ac.jp/member/researcher/entry-1964.html

③NIHU「現代中国地域研究」早稲田大学中心拠点メンバー・田中周情報
http://china-waseda.jp/waseda/blog/tanaka/

※「田中周研究室」HP は、本科研費プロジェクトの研究成果を広く公開し、社会に還元する目的で開設したものであり、日本語・英語・中国語での多言語情報発信が可能となっている。

６．研究組織

研究代表者
田中　周（TANAKA, Amane）
愛知大学・国際中国学研究センター・研究員
研究者番号：10579072